

# びわこの 考湖学

痛い目にあわせる・強く叱責するという意味で「灸をすえる」という慣用句がつかわれるように、お灸といえは熱さを我慢しなければならぬものですが、実は熱くない灸術もあります。

もぐさの液をツボに付ける「墨灸」がそれで、草津市穴村町のあなむら診療所は、熱くない灸が子供の夜泣きやカクに効く「穴村のもんや」として名高く、その評判は、近隣はもとより遠く京阪神や名古屋方面にまで知られており、昭和初期には1日1000人以上の人々が治療に訪れたそうです。

所まで足を運んだのでしようか。鉄道を利用する場合は守山駅や草津駅から、琵琶湖の航路を利用する人々は穴村港から「穴村のもんや」を目指しました。

明治のはじめに琵琶湖に蒸気船が就航すると、明治16年には大津と志那、赤野井を結んでいた船が穴村の港に寄港



あなむら

あなむらのお灸に行ったら

近くで串団子の名物販売された包装

## 穴村のもんもん

するようになりまし。穴村のもんもん」が評判となると、穴村港には立派な茶店が3軒(魚幸・港屋・大津屋)軒を連ね、エリ漁を楽しませる遊覧船や釣り客でたいそう賑わいを見せたといわれています。

港と診療所の2.5以上の道のりは、馬車や人力車、タクシーが1日1000人以上の「ぎよろし」を運んだといわれています。それらに乗り切れなかった人たちは、長い列を作って歩いていたそうです。また、昭和5年には草津駅から穴村までの間を軌道バスで結ぶという計画が立てられるほどでした。

その賑わいは今も「あなむら診療所」にある、明治中期の様子を描いた絵に残されています。

訪れた親子連れ目当てのおもちゃや飲み物、串団子でもてなす出店が並び、さながら門前市のような活況であったそうです。門の向かいにある和菓子店(吉田玉栄堂)では、昭和40年ごろから「もんもん」をつけられた子供の顔を描いた包装紙の「穴村のだんご」が売られています。

このように穴村の名物となった灸ですが、始まりは『日本書紀』に記載された天日槍伝承とかかわりがあります。そこには垂仁天皇三年三月条

に、天日槍が「菟道川より浜りて北近江国の吾名邑に入りて暫く住む」とあり、新羅の王子天日槍が吾名邑に一時住んだとあります。この吾名邑が穴村町であると考えられています。

穴村集落のほぼ中央、診療所の南東側にある安羅神社は天日槍命を祭神とされ、神体は「温石」で、灸術は天日槍がもたらしたとの伝承があります。なお、近隣の野村町にも安羅神社が鎮座することから、付近一帯は古代の安羅郷(安良郷)であったと考えられています。

ともあれ、お灸治療に琵琶湖航路が活躍した一面をうかがわせることがらです。

(滋賀県文化財保護協会 大崎康文)

## 行列のできる診療所